（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　中丸禎子

本論文は、スウェーデンの作家セルマ・ラーゲルレーヴ（Selma Lagerlöf, 1858-1940）について、わが国とドイツにおける受容の特徴を確認した上で、第一作『イェスタ・ベルリングのサガ』およびノーベル文学賞受賞作『エルサレム』を、近代とその問題性という視点から解釈したものである。

第一部は、わが国で一般的となっている「平和な理想国家」という北欧イメージの由来を問い、その中に、ラーゲルレーヴについての、北欧の「良心」を代表する「母性的・幻想的な平和主義作家」・牧歌的な「児童文学・キリスト教文学者」というイメージの成立を位置づける。新劇運動と森鴎外、女性解放運動と児童文学、キリスト者グループ、マルクス主義から転向した代表的北欧文学者山室静、という北欧文学受容史の概観は、それ自体このような形では類例を見ない。またわが国の近代化の過程で、近代西欧の周縁としての北欧が、主要なモデルとなった西欧とはまた違うモデルとして受けとめられたのであって、その結果、一面性や過度の理想化を伴った、という結論は説得力を持つ。

このような受容史的反省を出発点に、第二部は、1820 年代を舞台とする『イェスタ・ベルリングのサガ』（1891）を論じる。近代化以前の過去を郷土の自然とともに、しかも代々の伝承を語り継ぐがごとく語ってゆくこの作品の世界は、しかし、牧歌的な理想郷ではなく、善と悪、倫理性と野蛮性、強さと弱さといった、正反対のものが共存する世界であり、それは、作者の捉える二項対立を旨とする近代世界の反転像として近代の側から造形されている。そのように造形された前近代を美しく滅びさせ、「弔う」ことによって、それをこそ自らの過去として取り置きつつそこから身を離すことが、この語りがもつ機能である。前近代の物語はこうしてむしろ一種の補完物として近代を確証する。こう論じる本論文は、ラーゲルレーヴを、たしかに近代とその問題性の文脈に置き直し得ている。

こういったスタンスを持つラーゲルレーヴ文学が、ドイツにおいては実際、民族主義的な「郷土芸術運動」によって受容され、さらには（作家本人の政治的姿勢にもかかわらず）ナチズムの「血と大地」イデオロギーに利用されたことを第二部第三章で確認した本論文は、近代のそのような思想との親縁性と相違点を次の問題として立て、第三部の『エルサレム』（1901/02）解釈に入る。本論文がその関連で指摘するのは、まず男性優位と農耕の照応である。父祖代々の信仰と倫理に基づいて自己犠牲もいとわず行動する主人公、農夫イングマルの物語、またその父の物語でも、犯罪（子殺し）、狂気、迷信などは女性に割り当てられ、男性が赦しや啓蒙によって問題を解決する。それは、かつては大地母神の領域であった大地を耕地とする農民の営為とも重なる、支配の側面を持つ、と。さらに、主人公の妻が（父祖の行為のためかけられた呪いの結果）盲目・痴呆の子として生んでしまったと信じ、殺害に至りかねなかった嬰児が、健常と診断されて問題が解決するという展開にも、裏返せば優生思想に通底する価値観が見られる、と指摘する。他方、下肢の麻痺という身体障碍は治癒という神的奇蹟に与る能力でもあり、問題の嬰児の健常も、奇蹟の結果であったという読みが示唆されている。さらに、狂気が危惧される女性は、予言能力を持ち、明晰な理性認識と矛盾しつつ両立する一種神秘的な神性体験をもする。このように、近代において差別や隔離の対象となるさまざまな障碍に却って特別な意義が与えられてもいる点に、本文は作品がもつ、近代を超える可能性を見るのである。

本論文は、「近代」概念の重層性の整理の不十分さや翻訳に時に見られる不正確さに憾みを残すものの、作家の受容史を省みた上で作品解釈に関して新たな視点を提示した力量は、十分評価すべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。